

へいこうスパイラル
平行螺旋

作…こむろ こうじ

【あらすじ】

二〇一一年、震災津波で両親を亡くした姉妹が、避難所を出て、仮設住宅に引っ越してきた。姉は、市役所職員として働き、妹は定職が無いまま、先が見えない現実を受け入れて毎日を暮らす決意をしていく。

二〇一二年、三月。一年が経過したが、何ら変わらない現実に憤りを感じる二人。人との関わりが薄く、被災地支援を偽善と本音を言う妹に対し、人と関わりながら生きている姉はそれを諭す。

二〇一三年。二年が経過しても何ら変わることのない、仮設住宅の暮らし。不毛な会話をしながらも、先が見えない現実から逃避しつつ、生きているという小さな幸せを確認しながら生活を続けている。

二〇一四年、姉は未来が見えなくなってきている妹に、小説を書くことを提案する。しかし、それは妹だけのためではなく自分自身にも生きる糧を与えるものでもあった。

二〇一五年、姉は自宅の有った場所から見つかったタイムカプセルを持ち帰る。タイムカプセルには、震災で亡くなった母親からのメッセージがしたためられたビデオが入っていた。

母親からのメッセージを見て、姉は過去を忘れることで、妹は過去を忘れないことで、生きて行く力を見出してゆく。

しかし、放置された四年間は戻るはずはなく、彼女たちの未来は決して明るいものではない。

それが、被災地四年目の現実である。

【登場人物】

姉（29歳→33歳）碧（みどり）。

市役所生涯学習課文化財室勤務。

多くのことを背負いこんではいるが、表面上は明るく過ごしている。

妹（23歳→27歳）洋海（ひろみ）。コンビニのアルバイト店員。

震災以降、時として強迫観念に襲われ、自暴自棄な行動をとることが有るが、日常的には無気力。

※ 設定年齢は2011年の年齢。舞台の終焉には、2015年となる。その時点で、姉は33歳、妹は27歳である。未婚女性が29歳から33歳へと4年の歳月を費やす姉のリアリティと、定職が無いまま23歳から27歳へと時を経る妹のリアリティを念頭に置いて物語世界を構築していった欲しい。

〜ゼロ〜 二〇一一年八月十日 基準日

舞台は、何も無い菱形に区切られた4畳半の空間。

奥の2面だけに壁がある。上手側の壁には玄関に繋がるらしき口が一つ開いている。殺風景な部屋である。

明りがつくとその殺風景な部屋に、妹が、レジ袋を左手に下げたまま、蛍光灯のスイッチの紐を引く仕草で止まって立っている。

妹は、そのまま、その部屋をぐるりと見回す。

そこへ、姉も大量のレジ袋を抱えて現れる。

姉 大体のものはそろっているでしょう。

妹 ……だいたいね。

姉 だいたいそろってるって言っても、やっぱり食料は無いからね。持つてる袋…そこ、置いとして。冷蔵庫にしまっから。

妹は虚ろな目をしたまま、姉を視野の中に置きながらも見つめるでもなく、ただぼうっとして、^{そこ}部屋の全体像を眺め続けている。

姉はあくせくと荷物を片付け、新たな荷物を^{そこ}部屋に運びこむ作業をし続ける。^{そこ}部屋の隅の場所には、レジ袋に入っている衣類とおぼしきものを置く。

姉は、荷物を運び終えると、妹の斜めに向かいに座る。二人は精神的に安定できる九十度の角度で相対する。

姉 何か飲む。

妹 何かがあるの。

姉 避難所で、スティックコーヒーもらって来た…。

姉、隅の無造作に積み重ねられたレジ袋をかき分けて、スティックコーヒーを見つけたす。

姉 あった。

妹 ……残っている人たちの分じゃないの。

姉 大丈夫。私たちがほとんど最後だったじゃない。

妹 ……そう？

姉 そう。

妹 ……まだ居たじゃない。

姉、どこを見ているとも判断できない中空に視線を漂わせ、記憶たどる。

姉 ああ、齊藤さんとこも、明日には仮設に入るって。ここの仮設じゃ無くて、小学校の校庭の方…。小学生が居るから、学校に近い方がいいって…。

妹 そう。でも…。

姉 コーヒーは、避難所で生活していた私たちが持って行ってくれた方が助かるって…。

妹 誰かそう言ったの。

姉 避難所を運営していた、福祉協議会の小野さん。

妹 そう。

姉 断るだけが美徳じゃないよ。

妹 そう。

姉 空気読んであげなきゃ。

妹 …あたしには読めない。

姉、気まずそうな表情を浮かべ、

姉 無理して、気を使って、空気読む必要もないけどね。

気持ちの置き場が無いことが、手のおき場所が無いところから読み取れる。

姉 …お湯沸かすね。

姉、立ちあがって玄関口の台所へ行く。

タラアアアッ。テツテツテツテツ。ジヨゴジヨゴジヨゴ。

水圧の低い水道から水が流れる音は途中から、ステンレスの洗い場に落ちる音から、ヤカンに落ちる音、そしてヤカンに溜まった水をさらに満たす音に微妙に変わってゆく。

チチチチ。チチチチ。ボツ。

ガスレンジが点火する音が聞こえる。

妹、台所の方へ向って、彼女としてはがんばって出した少し大きな声で問い掛ける。

妹 ガス、もう出るんだね。

玄関口の台所からも、少し気を張って大きな声を出した姉の声を返ってくる。

姉 ええ。昨日のうちに、手続きしといた。

妹、天井の蛍光灯を見やりながらつぶやく。

妹 そうだよね、電気もついてるしね。

姉 ええ。

妹 …姉ちゃん、凄いなあ。

姉 何が。

妹 何でもできて。

姉 やらなきゃ無ければ、仕方ないでしょう。

姉、戻ってきて、妹の脇に座る。

姉 避難所の隣（の場所）にいた菅原さんたちは、夫婦で息子さん

のところへ行くんだって。
妹 息子さん、銀行に勤めてるんだっけ…。
姉 ええ。
妹 仙台…？
姉 泉だって、仙台駅から地下鉄で北の方に行ったとこ。
妹 そこは、大丈夫だったの。
姉 山手だから。店も普通にやってるってよ。アウトレットもあるんだって。
妹 ふうん。
姉 断水とか、停電とかはあったみたいだけど、今はもう普通みたい。
妹 ふうん。
姉 菅原さんの旦那さんってあんまりしゃべらないけど、奥さんがおしゃべりだから、色々聞いたなあ。旦那さん、切手集めが趣味なんだって。
妹 切手？
姉 旦那さんが、毎日切手の事を言うって、奥さんが愚痴ってた。
妹 ふうん。
姉 大事にしていた切手のコレクションが流されたんだって。
妹 ふうん。
姉 『見返り美人』はもう手に入らないだろうなって。
妹 『見返り美人』？
姉 切手のコレクターの中では有名な一枚なんだって。5円の切手が1万円もするらしいよ。
妹 ふうん。
姉 そしたら、『見返り美人』なら、ここにいるのにねえ。』って、菅原さんの奥さんがポーズ作ってたんだよね。おっかしくてさ。
妹 菅原さんの奥さん、ぽっちゃり系だよね。
姉 そう。でも、それが妙に色っぽくてさ…。

お湯が沸いたことを知らせる、ケトルの笛の音が聞こえてくる。

姉 あっ。(沸いた)

姉、立ちあがって台所に消える。

妹、天井の蛍光灯をぼうつと見ている。

妹 姉ちゃん。

姉 なぁに。

台所から声が聞こえる。

妹 私たち、どうなるんだろう。

姉 …さあ。

妹 姉ちゃんにもわからないの。

姉 わかる訳ないでしょう。

妹 ちっちゃいときから、いつつも、姉ちゃんは明日のことを話してくれてたでしょう…。

姉 想像してただけ。

妹 ソウゾウ？

姉 明日が怖いから、こういうことが有ったらこうするって、全部考えるの。

妹 凄いな。

姉 心配性なだけよ。

妹、過去を夢想するような遠い目をする。

妹 姉ちゃんは、何でも全部わかってると思ってた。

姉 私はわからないことだらけ、何もわかってない。

妹 私よりはわかってるでしょ。

姉 そうでもないわよ。あんたのソウゾウには敵わないわ。
妹 私のソウゾウは、夢の世界なだけ。

姉 だから、『創造』クリエイティブなんでしょう。私の『想像』は現実的で夢
が無いけど、あなたの『創造』は夢が有る。

妹 そうなのかな。

姉 人間、無い物ねだりなものよ。

妹 ……そうなの？

姉、カップにコーヒーをいれて現れる。

姉 でも、私たちは、それぞれ無いものを持っている。

妹 を見つめる。

姉 二人一緒なら最強だよ！

妹、姉を見つめて、ふっと笑う。

妹 そうだね。

妹、中空を見つめながら。

妹 ……姉さん。

姉 何？

妹 ここにいつまでいるの。

姉 いつまでって…期限が2年だから、それくらいじゃない。

妹 その後、どこへ行くの。

姉 ……どこでもいい。

妹 どこでもいい？

姉 そう住むところが有れば…。

姉、カップに口をつけた状態でほほ笑むと、二人の居る空間が二人の内面空間へと変わる。

そして、妹、すっと立ち上がる。

二人は、誰にともなく語りだす。

妹 私たちはいつまでも

姉 繰り返す

妹 繰り返す

くりかえし続けるこの

平行螺旋の空間の中で

いつまでも

妹 いつまでも

もがき続ける。

私たちは

先へは進めない

後へも戻れない

いつまでも

姉 いつまでも

いつまでも

…いつまでも

この場所に

この空間に

しがみついて、生き続けている。

姉 生き続けなければならぬ。

二人 命、続く限り。

二人、お互いの顔を見合わせ、不惑に笑う。

空間は青い薄闇に包まれる。

青い薄闇と音楽の中、二人の日常は繰り返される。

特別なことが無い一日一日が繰り返されるうちに、八カ月が経過する。

その月日は、部屋の装いが夏から冬に徐々に変わってゆく様子から読み取れる。それは日々繰り返す日常の中で、テーブルが次第に炬燵こたつになり、二人の衣服も次第に軽装になり、毎日の積み重ねにより、部屋の中にある『モノ』が増えてくる様子から、八カ月もの歳月が過ぎたことが感じられる。

スイチー 二〇一二年三月 一周忌

引き続き、仮設住宅の一室。

窓から夕闇が近いことを知らせるオレンジ色の斜光が差し込んでいる。

その部屋には生活感のある『モノ』が存在感を増しつつある。

二人が八か月を過ごした生活感が散りばめられている。

その部屋と台所の空間を区切る狭間の長押ながしには『がんばろう岩手』と書いてある暖簾のれんが掛けられている。

壁が屹立している角にはカラーボックスが置いてあり、その上に小さなテレビが一台。テレビの上には、丁度三角を作るように洗濯紐が張られていて、洋服がかけられていて、物干しの紐がそのままクローゼット状態になっている。

4畳半の部屋の中央に炬燵こたつがひとつ。座布団が二つ。

炬燵の上には、片付け切れていない新聞や雑誌、スナック菓子、お茶を飲んだらしいコップが雑然と置かれている。

玄関チャイムの音が一つ鳴る。

ピンポーン。

暫しの時間ほしを置いてもう一つチャイムの音が鳴る。

ピンポーン。

チャイムを押した人物が帰ったかと思われるほどの間の後、狂ったようにチャイムが連打される。

ピポ。ピポ。ピポ。ピンポーン、ピポ。ピポ。ピポ。ピポ。ピンポーン。

ガチャガチャと回して開けるタイプの鍵を開ける音がする。

無機質なサッシ戸とレールの間につまった砂が擦れる音がする。

ドカドカと、誰かが一人、靴を脱いで部屋の中に入ってくる音がする。

『がんばろう岩手』の暖簾をくぐって、コンビニの袋を手にはぐら提げた妹が、部屋の中に入ってくる。

妹。ピンポンしたのに…。

妹は、炬燵の先まですんずん進むと、くるりと振り向き、入口の暖簾を凝視こじする。

妹。がんばろう？……。

妹、目を見開き、息を大きく吸い、震えながら叫ぶ。

妹。がんばってるってばあああああああああああああああ！

妹、コンビニの袋を投げ捨てると、暖簾を剥はがし取る。

次にテーブル上のものを全部床に落とす、洗濯紐にぶら下がっている衣類をむしり取る。その暴挙を働いた後、茫然と立ちすくむ。暫しの間の後、妹は、その場にしゃがみ込み顔を伏せる。

「ただいまあ。」という、声が聞こえる。

「洋海（ひろみ）いるの？」と続けられる。

姉がその部屋（はしよ）に入ってくると、荒らされて散らかっているのを目にする。姉は一瞬驚くが、目を閉じあきらめの表情になる。周囲を見まわし、妹がひざを抱えるようにして、下手側の壁にうずくまっているのを見つける。

姉 どうしたの。

妹 ……。

姉、全体の様子を把握するように見回した後、肅々と片付け始める。

姉は無言で片付ける。姉が暖簾を拾い上げ、広げた時に、突然、妹が話し出す。

妹 こんなにがんばってるのに…『がんばろう』って言うから。

姉、もう一度暖簾を広げて見て、『ああ、これね。』という表情を浮かべる。

姉 ごめんね。ボランティアの人がくれたんだ。捨てるわけにもいかないし…。今度新しいのを買ってくるから…。

姉、暖簾を、丸めてレジ袋に詰めると、また肅々と片付け始める。

妹 だったら、我慢する。…捨てないで。

姉 我慢する必要無いよ。

妹 だって、私たちのために色々やってくれた人でしょう。

姉 我慢すること無いよ。

妹 だって、自分には関係ないのに、一生懸命にやってくれた人がくれたものでしょう。

姉 我慢すること無いよ。

妹 もっと私たちががんばって欲しいんだよ！

姉 我慢すること無いって！

妹 ……。

姉 …ごめん。

妹 なんで、姉ちゃんが謝るの。

姉 ごめん。

妹 だからなんで。

姉 良かれと思っしてることなんだから。

妹 だから、なんで姉ちゃんが謝るの…。

姉 お世話になったからだよ。

妹 そう。

姉 良いことだと思っしててるんだよ。ゆるしてあげてよ。

妹、確信めいた表情で、すっと立ち上がる。

妹 ……偽善なんだ。

姉 えっ。

妹 被災地支援に来てる人たちはみんな偽善者なんだ。

姉 そんなことは言わないで。

妹 でも、そうでしょう。偽物の善意をあたしたちに押しつけてる。

姉 ……。

妹 もう、壊れそう！

姉 偽物なんかじゃないよ。本気で、ここの人たちのためにやって

くれたる人たちがほとんどなんだよ。
でも、それで、私たちの心を傷つけている。
姉 傷つけたくてやってるわけじゃないよ。
妹 じゃあなんで。
姉 えっ。

妹 なんで、こんなことになっちゃうわけ。
姉 私たちの心の中までは見えないから…。
妹 心の中が見えない？

姉 一生懸命に考えても、ここで生まれてここで暮らしていないから、本当はわかってもらえないんだよ。
妹 そんなこと…。

姉 でも、それでも、精一杯考えてくれて、それでやってってくれるんだから。
妹 ……。

姉 口ばかりで、何もしない人より、よっぽど偉いよ。
妹 ああああああ。
姉 ああああああ。

妹、錯乱して叫び声をあげて机をたたきだす。

姉 ごめん。自分を責めたつもりだったのに…。
妹 ああああああ。

姉、暴れる妹を抱きしめる。

姉 ごめん。

妹、少し落ち着いてくるが、体と声を震わせながらつつやく。

妹 ……誰が悪いの。
姉 ……誰も悪くない。

妹 ……じゃあ、どうしてこんなに辛いのか？

姉 津波が悪いの！海が悪いの！

妹 ……海……。

姉 そう、海。

妹 …………海は悪くない。

姉 えっ。

妹 海は悪くない！

姉 ……。

妹、声を震わせながらつぶやくように語りだす。

妹 海を悪く言わないでよ。あたしたちの、みんなの、大切なものを皆持って行ったよ。憎いさ、腹が立つさ。でも、海は、海は

そうしようと思っただけで津波が起きたわけじゃない。海は悪くない。海は悪くない。海は……。

海は悪くない。海は……。

姉 海は？

妹 海は私だもん……。

妹、ペタンと座る。

姉 ……そうだね。海を悪く言ったら、洋海（ひろみ）の名前に海を

入れた父さんと母さんも悪者になっちゃうものね。

妹 そうだよ。海も悪くない。

姉 ……。

妹 父さんも悪くない。

姉 ……。

妹 母さんも悪くない。

姉 そうだね。

妹 母さんも悪くない……。母さん、母さあくん……。

妹、泣き出す。

姉、妹の頭を抱きかかえる。

姉 洋海（ひろみ）……。大丈夫だから……。大丈夫。

泣きじゃくる妹を姉が抱きかかえながら……。場面は青に包まれる。

〜ニイ〜 二〇一三年八月 当初の入居可能期限

日

その部屋は、次第に、そこで更に二年以上暮らした生活感が漂っている雰囲気醸し出してくる。一年半前は炬燵だったものは、布団が取り除かれ、テーブルになっている。

夏になっている。それも、その後二度目の夏だ。

妹、壁に設置してあるエアコンの前に立って、顔に涼しい空気をあてながら突っ立っている。

そこへ、姉が帰ってくる。

妹 あ〜〜。

姉 ただいまあ。…何やってんの？

妹 エアコンだと、扇風機みたいに声が震えたりしないんだね。

姉 あたりまえでしょう。

妹 …外、凄く熱の？エアコンの室外機が沢山あるからかな。

姉 全国的に暑いみたい。ここの仮設だけじゃないよ。

妹 そう。

姉 気楽なもんね。あんた、ここから出てないんだから、暑くないでしょう。

妹 暑い。この部屋から出たらとけちゃう。
姉 あんたはアイスか。
妹 こんなに冷やしているのに、玄関の方からむんむんの空気が来るもんね。
姉 あたりまえじゃない。でも、ここは私の職場から比べれば楽園よ。
妹 職場って、発掘現場。
姉 そう。
妹 こんなに暑いのに今日も外にいたの？
姉 そう。早く発掘を終わらせないと、フッコウジュウタク建てられないでしょう。
妹 大変ですねえ。
姉 ホント、他人ごと何だから…。
妹 倒れる人とか居ないの？
姉 現場周って、水分補給を促すとか、そんなことも私の仕事。
妹 ご苦労さんです。

妹、立ったままで、エアコンの風を受けながら目を閉じている。

姉 仕事に行かなくて良いの？
妹 行きたくない。
姉 そりゃあ、そうでしょう。あたしだって行きたくない。
妹 行かなきゃいいのに。
姉 そういうわけにもいかないでしょう。二人とも働かなくてどうやってご飯を食べるの？
妹 どうにかなるんじゃない。
姉 どうにもなりません。これだけ発達した現代社会で、飢え死にする人もいる。それが、今の日本なのよ。
妹 ふうん。
姉 どうせ、一日そうやってフラフラしてるんなら、仮設の中のお

じいちゃん、おばあちゃんの家を回って、ここ機嫌伺いのボラン
ティアでもしたら。

妹 大学生が来てるじゃない。

姉 去年までね。

妹 去年まで？

姉 もう、ここにはほとんど来ないよ。自治会長さんとか、『去年
までは流しそうめん』とかやってくれたんだけど、リーダーに
なっていた子が、就職したとかで、今年は来られないって…。

妹 えっ？

姉 はがきをもらったんだって。就職しましたって。

妹 そりゃそうだ。他人のことより自分のことが大事だもん。

姉 代わりに、あんたが何かしてみたら…。

妹 人に会いたくない。

姉 仲間でもいれば何かできるんだけどね。

妹 みんな、仙台とか盛岡に出て行っちゃった。

姉 そうね。

妹 みんな知らない土地で無理に笑って暮らしてるのかな。

姉 営業スマイルも、慣れればどうってことないよ。

妹 無理な笑顔を作りたくない。

姉 そりゃあ、そうだ。

妹 笑いたくもない。

姉 笑う相手がいなきゃね。

妹 だるい。

姉 …私も。…あんたといると、気が滅入るわ。

妹 ごめん。…消えるか…。

姉は妹の発言に対し、適切な答えを暫し考える。

姉 …そういうこと言ってるんじゃないの。言いすぎた。ごめん。

妹 こっちがごめんだよ。
姉 ごめん。
妹 …お互い気を遣いすぎだね。
姉 そうだね。姉妹なんだから、無理せすい「ううよ」。
妹 そうだね。

妹、相変わらず、エアロンの前に立ちっぱなしでいる。

妹 …今月中なんでしょう。
姉 何が。
妹 仮設にいられるの。
姉 そうでもないみたいよ、
妹 そうでもないってどういうこと？
姉 延長になったみたい。
妹 延長？
姉 そう、延長。
妹 何それ。
姉 コウエイジユウタクの建設が思うように進まないから、延ばしてくれるんだって。
妹 何それ。
姉 ありがたいことでしょう。行く先が決まっていけないのに、出て行けって言うことは言わないでいてくれるんだから。
妹 ただ、ただ、先延ばしにしないで、早くコウエイジユウタクを作れっちゅうの。
姉 そんなこと言わない。
妹 だって。
姉 用地買収とか、予算のこととか、色々あるんだから。それと、私の仕事の関係のことも…。
妹 また、何か出たの。
姉 まあね。

妹 何が出たのよ。

姉 貝塚。

妹 なあんだ、ゴミ捨て場か。

姉 貝塚は、その当時を知る貴重なタイムカプセルなのよ。

妹 不法投棄の現場も、後5000年後くらいには、貴重なタイムカプセルだなんて、言われるのかもね。おお、これがこの時代に化石燃料を加工してつくられたペットボトルと言うものか…何てね。

姉 不法投棄の現場と、貝塚を一緒にしないでよ。

妹 一緒です。ゴミ捨て場じゃないの。

姉 合法的に住民が指定して捨てた場所なんだから、不法投棄とは違うでしょう。縄文の人たちは、今の人たちのように、自分だけの利益のために、環境を破壊する行為はしていません。

妹 そうですね。縄文人は素敵な人たちです。

姉 そうよ、現代人は縄文をちつとも理解していない。地球環境に優しい、究極のエコな生活を何世代も実践してたのよ。素晴らしいことじゃないの。

妹 姉ちゃんは、仕事の話になると熱くなる。

姉 だって、縄文人はすごいんだから…。

妹 姉ちゃんは、縄文人と結婚すればいいんだ。

姉 縄文人がここに居れば、迷わず結婚させていただきます。

妹、ふっと寂しそうな表情を浮かべる。

妹 そうしたら、私を置いて出て行くの？

姉、妹の心もちを感じ取る。

姉 あ、あなたにも、縄文人のイケメンを紹介してあげる。

妹 あたしは、縄文というより弥生がいいなあ。

姉 贅沢言わない。夏の盛りにエアコンの前から動かないような人と結婚してくれるんなら、縄文でも弥生でも文句は言わないの。へいへい。しかし、不毛な妄想だね。

妹 全く…。

姉 姉ちゃん…。

妹 何？

姉 アイヌ食べたい。

妹 は？

妹 ハーゲンダッツってはないから、ガリガリ君で良いから…。買ってきて…。

姉 よし、アイス買いに行こう。

妹 えっ。姉ちゃん買って来てよ。

姉 働かざる者食うべからず。一緒に行つてあげるから、あんたが買いなよ。

妹 えっ。今日、せつかくの休みなのに…。

姉 コンビニじゃ無くて、でっかいスーパーができたから、そつちに行つてみよう。

妹 暑くて行きたくない。

姉 じゃあ、アイスは諦めてね。

妹 …仕方ないなあ。行くか。

姉はその気になった妹を押し出すように、二人で部屋そこから出て行く。

その部屋ほしはまた時間の経過を表す青い陰に包まれる。

テーブルには炬燵掛け布団がかけられる。炬燵の上にはミカンが置かれる。冬の装いに部屋が変わってゆき、半年の歳月が流れ去る。

くサンく 二〇一四年三月

進めず戻れないスパイラル

年月の経過は、壁に掛けてあるカレンダーを見ることによって感じられる。しかし、部屋は、夏の装いが冬のものになっていてだけで、今までのような大きな変化は見られなくなってきている。妹、部屋の中で胸のところまで炬燵に入って寝転がっている。姉が厚手のダウンジャケットを羽織って、現れる。

姉 あああ。寒い。

姉、ダウンジャケットを脱ぎながら…。

姉 仕事行かなくて良いの？

妹 来なくていいって。

姉 えっ。

妹 先週から、高校を卒業したばかりの子が来た。

姉 へえ。でも、あんたの方が、仕事できるでしょう。

妹 私より、愛想笑いが上手。

姉 そう。

妹 簿記検定も持ってるし、ソロバンもできる。

姉 へえ。

妹 震災で停電になった時、何もできなかった私とは違うの。電卓使って会計もできる。

姉 あんただって計算機使って計算くらいはできるでしょう。

妹 計算の仕方は知っているけど、計算はできない。
姉 どういうこと。
妹 計算の仕組みは知っているけど、計算の使い方は教えてもらわ
姉 なかった。
妹 誰も、そんなこと教えてもらわないわよ。
姉 教えないことまでするのは、良くないって教わった。はみ出す
妹 なって…。
姉 そう。
妹 若い子たちははみ出しても誉められる。
姉 …あの時から、人を計る価値観も変わったのかもね。
妹 そう、それから、新しい子はパソコンもできるし、運転免許も
姉 持っている。英語検定もジュン２キユウだって。
妹 そんなにできる子がコンビニでバイト？
姉 優秀でも、この町で暮らそうと思ったら、仕事が無いんだよ。
妹 えっ。
姉 ここじゃあ、仕事は無いんだよ。
妹 この町が好きでここで暮らしたくても、仮設店舗で営業してい
姉 る店じゃ、新しく人を雇う余裕はないし、おっきな会社も無い
し…。
姉 建設業の求人はあるでしょう。
妹 でも、女の子の求人は少ないし、ここの復興道路ができれば、
姉 別のところへ行かなきゃならなくなるでしょう。この町で仕事
をして暮らして行くことはなかなか難しいんだよ。
妹 ごめん。仕事がある私は、わかってあげることができて無かつ
姉 たね。
妹 また、ごめんだ。
姉 だって。
妹 姉ちゃんは悪くない。

姉 ……。

妹 悪いのは私。

姉 ……。

妹 私がもう少しがんばれば良いんだ。

姉 仕事、探してくるから。

妹 ……。

姉 あんただって、賢いんだから。仕事はあるって。

妹 ここでは、賢さは必要ないんだよ。

姉 えっ。

妹 賢さよりも、笑顔なんだよ。

姉 そう、なの。

妹 あたしには一番難しいことだ。

姉 そんなこと無いって…。

妹 ……だるい。

姉 えっ。

妹 考えるのも面倒くさい。

姉 ……。

妹 生きるのも面倒くさい。

姉 あきらめちゃ、だめよ。

妹 消えるのもめんどくさい。

姉、妹に何と声をかけて良いかとつさに思いつかず、考えあぐねるが、遂にあることを思いつく。

姉 ……そうだ、小説書いてみない？

妹 小説？

姉 あんたなら、書けるんじゃない。昔からたくさん本も読んでい

たし…。

妹 ……。

姉 小学校での将来の夢に『小説家』って書いてたじゃない。

妹 何で知ってるの！
姉 あんたの学年の小学校の卒業文集、全部読んだ。
妹 変なところがママなんだから。
姉 あんたのことは全部知っておきたくて。
妹 お母さんみたい。
姉 今は、そんな（お母さんみたいな）もんじゃない？
妹 違う。
姉 ええっ。
妹 姉ちゃんは、姉ちゃんだ。
姉 そりゃ、そうだ。
姉 どう？
妹 ……もう…。
姉 書いてみない？
妹 ……うん…。
姉 小説なら、ここでパソコン一台あれば書けるじゃない。ネット使って、ここから、応募することもできる。
妹 小説か…。
姉 印税が入れば、ぐでぐでしていても生活できるよ。
妹 小説ねえ。

姉、妹の顔を覗き込む。まんざらでもなさそうな表情を見て、目を輝かせて自分自身に語りかける。

姉 そうね。新しい価値観ね。そうだよ、ネットがこれだけ普及してるんだから、才能さえあれば住んでいるところなんて関係ないよね。
妹 姉ちゃん、何熱くなってるの？
姉 とりあえず、ネットで調べてみるね。小さいのからコツコツと。
妹 まだ、やるって言って無いでしょ。
姉 やってみようよ。

妹 え〜っ。
姉 やらないの。でも、顔に『まんざらでもないかな…。』って書いてあるわよ。
妹 変なこと言わないでよ。

妹、顔を手で隠し、暫く考えを巡らせた後、ぼそりと呟く。
つぶや

妹 …ダメでも誰にも迷惑かからないよね。
姉 かからない。
妹 姉ちゃんには迷惑をかけるよ。
姉 何もしない迷惑より、何かしての迷惑なら、買ってでもしたいくらいだ！
妹 姉ちゃんは、良いの？
姉 良いに決まってるよ。応援する。
妹 この部屋から出なくても怒んない。
姉 本気でやるんなら。
妹 アイス買ってくれる？
姉 ん〜。
妹 いいじゃん。
姉 じゃあ、短編でも良いから、雑誌に掲載されたら、ハーゲンダッツ。
妹 ハーゲンダッツ！
姉 ハーゲンダッツ！
妹 じゃあ、…やってみるか…。
姉 そうこなくっちゃ。

姉、笑顔でパソコンを開く。

姉 ハーゲンダッツ凄いいねえ。

妹 そりゃそうでしょう。ハーゲンダッツは特別な時にしか食べられないんだから。

姉 お父さんが買ってきてくれたのは、高校合格の時！

妹 それと、運動会のチャンスレースでまぐれで一等賞を取った時！

姉 あんたが生まれた時！

妹 あっつ。ずるい。その時、あたし食べてない。

妹、本気でふくれっ面をする。

その顔を見て、姉、ほほ笑む。

姉 何か、本当に久しぶりに目の前が明るくなったって感じたね。

妹 えっ。

姉 人間って、先へ進めるかもって思えることが生きることの糧になるんだね。

姉、カチカチとキーボードをたたく。

姉 あっ。これなんてどう。『日常のさりげない出来事をエッセーに』掲載作品には二千円。

妹、パソコンを覗き込む。

妹 良いかも…。姉ちゃんのことを書いても良い？

姉 でも普通よ。

妹 普通だと思ってるのは自分だけ。客観的に見ると、面白いんだから。『濃い顔の縄文人に恋をしている縄文女子』…。

妹、姉の顔を正面から見ると。

姉、吹きだして、話を続ける。

姉 仕方ないわね。良いよ。好きに書いてください。
妹 楽しみにしててね。…ふふっ。
姉 笑ったな！何想像したのよ。
妹 内緒。書いたら見せたげる。楽しみにしてて…。
姉 楽しみ！楽しみ！作家先生、がんばってくださいね。
妹 …姉ちゃん。
姉 何？
妹 姉ちゃんにつられて、あたしも何だか楽しい。
姉 そう♡

二人、笑顔で見つめ合う。二人を青い光が包み込む。青い光の中は相変わらず時間の進みは早い。しかし、時間は進んでも、その部屋ほしよの装いは変化しない。これが惰性に包まれた生活だ。一年前と一年後では違いが感じられない。しかし、確実に二人の時間だけは経過している。

〜シィ〜 二〇一五年三月

過去の母からのメッセージ

炬燵の上にノートパソコンが一台開きっぱなしのままになっている。

妹、炬燵に潜りこむようにして眠っている。一年前と同じ状態だ。そこへ、玄関口から姉の声が聞こえてくる。

姉 居る？
妹 ……。

姉 居るよね。雑誌買ってきたよ。…あいたっ。

ずぼっという、変にこもった音が聞こえる。

炬燵の中の妹が、むっくりと体を起こし、台所の方に向かって話す。

妹 どうしたの。

姉、台所の方から妹に声をかける。

姉 とうとうやってしまいました。腐った床板を踏み抜いてしまいました。はははは。

妹 姉ちゃん。良いの壊したのに…。

姉 良いの、良いの。壊そうと思って壊したんじゃないから。

姉、コンビニの袋と小さなかばんと重そうな大きなバックを抱えて現れる。姉の足からは血が流れている。

しかし、姉は、そんなことも構いなしに、コンビニの袋から雑誌を取り出す。

姉 そりゃあ、二年のつもりで建てている仮設に、四年も住んでれば、床も腐るわ。明日、住民生活課に電話して、直してもらおうよ。でも、良いのこれくらい。

あれれっ。血が出てるわ。でも、まっ、良いか。はははは。

妹 テンション高いよ。

姉 いいの。これでテンションあげないで、いつテンションあげろって言うの。

妹 大丈夫？

姉 これで、掲載五本目だよ。作家先生、凄いよ。よくやった。よしよし。

姉、妹の頭をぐしゃぐしゃにして撫でる。

妹 凄くないよ。

姉 凄いや。全国紙だよ。それも賞金は今までの最高！

妹 五万でしよう。

姉 五万だよ！

妹 今までのところ、二千元、五千元、五千元、一万円。

姉 そして、今回遂に五万円！やったじゃない。もう、作家じゃない！

妹 年収七万二千元。これで作家なんて恥ずかしくて言えないでしよう。

姉 でも、被災地の誇りよ。何も無い町に住んでいて全国誌に掲載されるなんて。作家だよ！

妹 作家じゃ無いって。佳作だし。

姉 着々と印税生活が近づいているねえ。

妹 姉ちゃんは前向きだねえ。

姉 ゼロじゃないんだから。自信持ってよ！

妹 姉ちゃんが一番嬉しそう。

姉 そりゃあそうよ。あなたの才能を見出したプロデューサーは私なんだから。

姉、ふと気がついて、持ってきたバックを開く。

姉 それから…ちよつと待ってて。良いものが届いたんだよ。次回作のネタになりそうだから…。

姉、得意気な笑顔で、ブリキの缶を取り出す。

姉 じゃあああん。

妹 何それ。

姉 タイムカプセル。家が有った場所から掘り出された。

妹 タイムカプセル？

姉 父さんが、洋海が生まれたのを記念して庭に埋めたもの。嵩上
げ工事をするときに出てきたんだって。文化財室に届いたし、
名前も書いてあったから、もらって来た。

妹 本家に家のなの。

姉 間違いないよ。名前ついてるんだから、ほら。

姉、缶の表を見せる。

妹 本当だ。下手な字で『みどり』って名前も書いてる。姉ちゃん
の好きだったセーラムーンのシールが貼ってある。それも、
マーキュリーだ！

姉、缶を開ける。

姉 この缶ね、ビニルでしっかり包まれていたから、中にも水が入
らなかったらしいよ。

姉、パカッと缶のふたを開ける。

姉、缶の中を覗き込み、一つ頷く。

姉 やっぱりね。

妹 何が入ってるの。

姉 ビデオテープだよ。

妹 ビデオテープ？

姉 たぶん、お母さんが映ってる。

妹 姉ちゃん知ってたの。

姉 埋めた後に、内緒だつて言いながら父さんが何度も教えてくれたから。ビデオテープ、それもVHSだと言うことまで見越して…。

姉、もうひとつの大きなバックから、ビデオデッキを取り出す。

妹 用意周到。
姉 任せて。

姉、コードでビデオデッキとテレビをつなぎながら話す。

妹 良く、ビデオデッキが有ったね。

姉 ふふうん。

妹 ビデオデッキってもう既に骨董品なのに…。

姉 だからこそ、文化財室にあったって言うこと…。

妹 職権乱用。

姉 何とでも言いなさいよ。

妹 でも、流石ね。

姉 つながった、かけるよ。

妹 うん。

姉、ビデオテープをデッキの中に入れて、デッキが動き始める。

テレビに映像が映し出される。

テレビの中の映像には姉と瓜二つの人物が映し出されている。

妹 あっ。母さんだ。

姉 そうだね。

妹 姉ちゃんとそっくり。

姉 今の私と同じくらいの年だもん。

テレビの中の人物は、小さい子と一緒にだ。テレビの中の人物のお腹は、こんもりと膨れている。

妹 あっ姉ちゃんだ。

姉 お腹には、あんたもいるね。

テレビの中の女性は、カメラに向かって話し始める。

女性 どうして、こんなことをするのよ。はずかしいわよ。…仕方ないわね。

咳払いをする。

女性 大きくなった、碧^{みどり}ちゃんそれから、洋海^{ひろみ}ちゃん。洋海くんかもね。お父さんが、碧ちゃんがお嫁に行くときに披露宴で流すんだと言って、このビデオを撮っています。

妹 男でもひろみだったんだ。

映像の女性は話し続ける。

女性 碧の結婚式の設定だったよね。とりあえずおめでとう。今日は私の思う幸せの形について話をするね。結婚は、幸せの形の一つです。旦那さまとの幸せを大事にしていってください。でも、幸せの形はそれだけじゃ無いのよ。きちんと仕事を持って生活ができることも幸せの一つの形、夢に向かって走り続けることも幸せの形の一つ。

そんなあなたの色々な形の幸せを、全部受け止めてくれる人が、貴方の隣にすることを、私は確信しています。

姉 母さんごめん。まだ居ないや。

女性 でもね、一番大事なことは、自分の傍にいる人を全力で幸せにしてあげようと毎日一生懸命に暮らすこと。そうすれば、自然と自分も幸せになれるってこと。それこそが、ずっと幸せでいられる秘訣かな？

妹、姉の顔を見る。

妹 お母さん、隣の部屋であたしたちのことを見てるんじゃない。
姉 このコメントを聞いてると、そう思えるよね。

二人、またビデオに視線を移す。

女性 そして、今の幸せのために、過去を忘れることも大事なこともかもしれない。隣にいる誰かのために、お母さんお父さんを忘れることも、次の幸せをつかむために大切なことかもしれない。あなたたちの幸せのためなら、私たちは忘れられても構わない。今の幸せを大切にしてください。…ちよつと、カッコつけすぎかな…。はい、カット。

テレビの画像が消える。二人は消えた画像を見続けるが、それぞれ一筋の涙がこぼれ落ちる。

妹 …お母さん、そんなこと言わないでよ。

姉 母さん、未来が見えているような話しぶりだったね。

妹 あたしは、あたしは、母さんと父さんのこと、絶対忘れないよ。

姉 忘れるってすごく悲しいことだけど、忘れるから生きていけるっていうこともあるんだ。

妹 私は忘れない。

姉 忘れても良いんだね。

妹 私は忘れない。

姉 良いよ。あんたは忘れなくて。忘れないことを力にして生きて行けば良い。

妹 うん。

姉 私は忘れる。

妹 うん。

姉 だって、お母さんが忘れても良いって言ってくれたんだもん。

妹 私は忘れない。

姉 良いよ。

妹 忘れない…。

妹、泣きじゃくりながら、小さく一つ頷く。

姉、涙を拭い、笑顔を浮かべる。

姉 さあ、入賞祝いだ！

姉、立ち上がり、玄関口の台所へ一旦消えると、ハーゲンダッツのアイスを持って現れる。

姉 じゃああああん。

妹 ハーゲンダッツウ〜〜〜〜！

姉、持っていたアイスの一つを妹に渡す。

姉 乾杯！

妹 乾杯！お母さんにも乾杯！ビデオを残してくれたお父さんにも！

二人、アイスで乾杯をし、黙々と食べ始める。

妹 ハーゲンダッツ一個でも幸せだよ。
姉 そうだね。
妹 沢山の幸せなんていらぬ。今ならハーゲンダッツ一個分の幸
せで十分。
姉 それだ！
妹 何？
姉 次回作！『ハーゲンダッツ一個分の幸せ』！
妹 それだ！姉ちゃん天才！
姉 あんたが言ったんじゃないの。
妹 そうか。『ブリキのタイムカプセル』は、どうするっ？
姉 それもあつたか！ネタはあるねえ。どんどんいけるね。
妹 姉ちゃん。
姉 何。
妹 ……笑顔と勇気、ありがとう。
姉 あんたに私は、希望をもらってるんだから…。こっちこそあり
がとう。

二人の姉妹は笑顔で明日を見据える。

二人はシルエットで包まれた後、青い暗闇の中に溶けて行く。

終幕